



その6

遺跡出土の生活用具で探る木材利用

京都大学総合博物館准教授 村上由美子

なかで大きな比重を占めるようになり、耐久性のある樹種として西日本ではアカガシ亜属が、

東日本ではクヌギ節（せつ）≡生物学の分類で属を細分する際の階級。種の上に当たる）が選択

日本各地の遺跡からは、膨大な数の木製品が出土しており、樹種データの蓄積も2012年時点の集計で約40万点を数える（1）。通常は木が埋もれると分解されて土に還ってしまうが、川や湿地、溝や井戸の中に埋没して泥にパックされた状態であれば、木は数百年、数千年の間も斧の刃跡や使用時の痕跡をとどめたまま遺存する。発掘現場で見つかった木製品は、遺跡で活動した当時の人びとが周辺の環境とどのように関わり、どんな暮らしを営んでいたかを知る上で重要な情報源となる。

約40万点のデータを樹種別に集計し、全ての時代を通してみると、日本列島においてはスギ、次いでクリが最も多用されてきた樹種であることがわかる（表右）。時代別に見ていくと、縄文時代・弥生時代はスギでなく広葉樹（クリ・アカガシ亜属）が最も多く使われている。縄文時代に東日本の諸遺跡でクリ材が多用され、クリ林を人為的に維持することで木材と果実の双方が活用されたことは、本連載その2（遺跡から見えてくる縄文人の森林資源管理、能城修一）で紹介されている。続く弥生時代には、水稻耕作の受容と生業の変化にもなって、水田を拓き水を導くために鋤や鋤などの農具が道具類の

表 日本列島における時代ごとの主要樹種 文献（1）所収のデータをもとに集計

| 縄文時代 (n=69999) | | | 弥生時代 (n=73865) | | | 全ての時代 (旧石器時代～近代) (n=396596) | | |
|-------------------|-------|--------|-------------------|------|--------|--------------------------------|-------|--------|
| 分類群 | 点数 | 割合 (%) | 分類群 | 点数 | 割合 (%) | 分類群 | 点数 | 割合 (%) |
| クリ | 13134 | 18.8 | アカガシ亜属 | 9023 | 12.2 | スギ | 37862 | 9.5 |
| トネリコ属 | 8133 | 11.6 | スギ | 8727 | 11.8 | クリ | 31580 | 8.0 |
| コナラ節 | 3724 | 5.3 | クヌギ節 | 6390 | 8.7 | クヌギ節 | 24986 | 6.3 |
| ハンノキ亜属 | 3309 | 4.7 | クリ | 4102 | 5.6 | ヒノキ | 22823 | 5.8 |
| カエデ属 | 2374 | 3.4 | コナラ節 | 4060 | 5.5 | コナラ節 | 20669 | 5.2 |
| ヤナギ属 | 2093 | 3.0 | シイ属 | 3506 | 4.7 | トネリコ属 | 17398 | 4.4 |
| クヌギ節 | 1974 | 2.8 | モミ属 | 2758 | 3.7 | アカガシ亜属 | 17116 | 4.3 |
| アカガシ亜属 | 1932 | 2.8 | ヒノキ | 2661 | 3.6 | モミ属 | 15629 | 3.9 |
| クワ属 | 1775 | 2.5 | (スギ) | 2007 | 2.7 | トチノキ | 10091 | 2.5 |
| スギ | 1701 | 2.4 | ハンノキ亜属 | 1895 | 2.6 | ケヤキ | 9318 | 2.3 |

※（スギ）は肉眼観察によりスギと識別された資料。

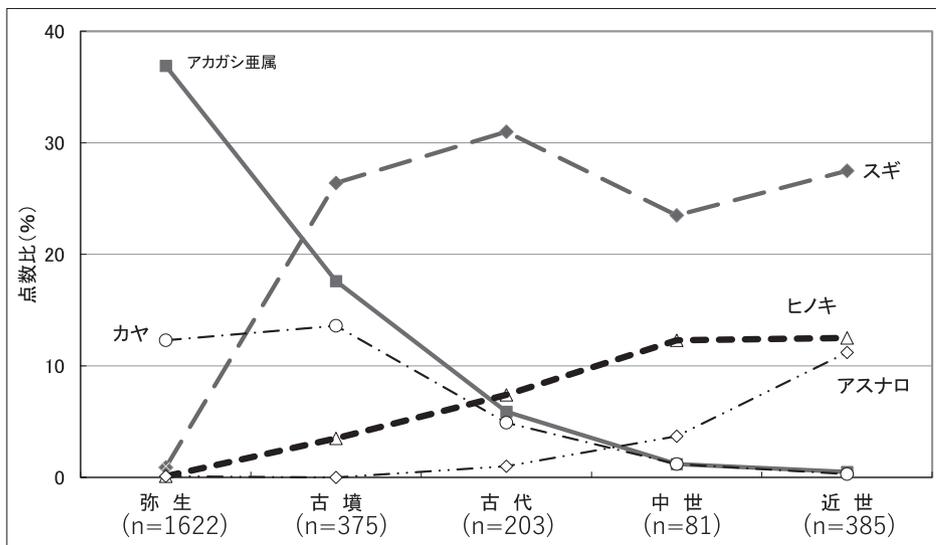


図1 池子遺跡群の主要樹種の割合の変化 文献（2）所収のデータをもとに集計

された。弥生時代の主要樹種（表中）でこの両樹種が多くを占めるのは、作りかけの未成品も含めて、農具や工具がさかんに製作・保管されていたことを反映している。地域によって樹種や変化の生じた時期に差はあるものの、全国的な傾向としては、弥生時代後期になるとアカガシ亜属など広葉樹の比率がやや下がり、スギなどの針葉樹が卓越していく（2）。

事例検討

神奈川県池子遺跡群の用材傾向

「広葉樹から針葉樹へ」の変化がひとつの小地域で明瞭に捉えることのできる事例として、神奈川県池子遺跡群の弥生時代から近世にかけての樹種データを取り上げ、時期ごとの主要樹

種の変遷を示す（3）。弥生時代には木製品（道具としての名称のない加工材や丸木・棒を含む）全体の3分の1以上をアカガシ亜属が占めていたが、古墳時代には代わってスギが台頭し、その後、近世に至るまで最も多く使われ続けたことがわかる。また、ヒノキやアスナロといったヒノキ亜科の樹種が中世から近世にかけて次第に増加する（図1）。

池子遺跡群の生活用具からみた木材利用の変化（弥生〜古墳時代）

本稿ではとくに生活用具の用材に焦点をあてて、池子遺跡群における木材利用の様相を時期別に明らかにしていく。生活用具とは、衣食住にかかわる道具類を

差し、下駄や容器、堅杵、腰掛などを含む（5）。腰掛は、風呂場の椅子のような低脚のもので、脱穀用の堅杵と同様、東南アジア稲作地帯の農村では現在も見かける道具である。池子遺跡群で出土した弥生時代の腰掛（図2-8、半分のみの残存）は、モミ属の一木を彫り込んだ刳物で、一見すると浅い容器のような座面をもつ。土間での生活や屋外での作業に座面の低い腰掛をつかう生活様式が、古代以前の日本にも存在したと考えられる。

弥生時代の堅杵は、池子遺跡群で出土した11

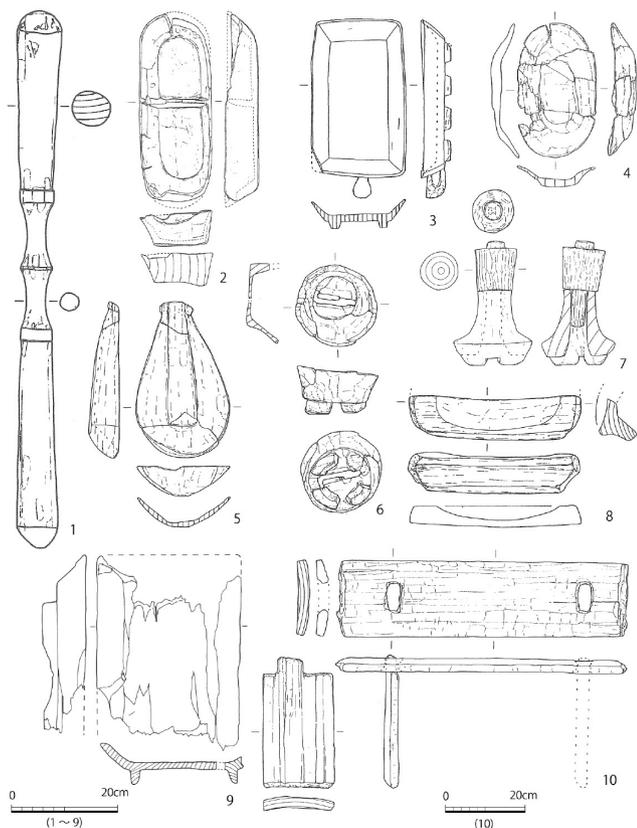


図2 池子遺跡群の木製品（弥生〜古墳時代）

《1〜8: 弥生時代中期、9〜10: 古墳時代前期》

1. 堅杵 2〜4. 槽 5. 杓子 6. 四脚付容器 7. 高杯 8. 割物腰掛 9. 槽 10. 指物腰掛
 (1. アカガシ亜属 2〜6. ケヤキ 7. 軸部=イヌガヤ, 脚部=ケヤキ 8. モミ属 9〜10. スギ)

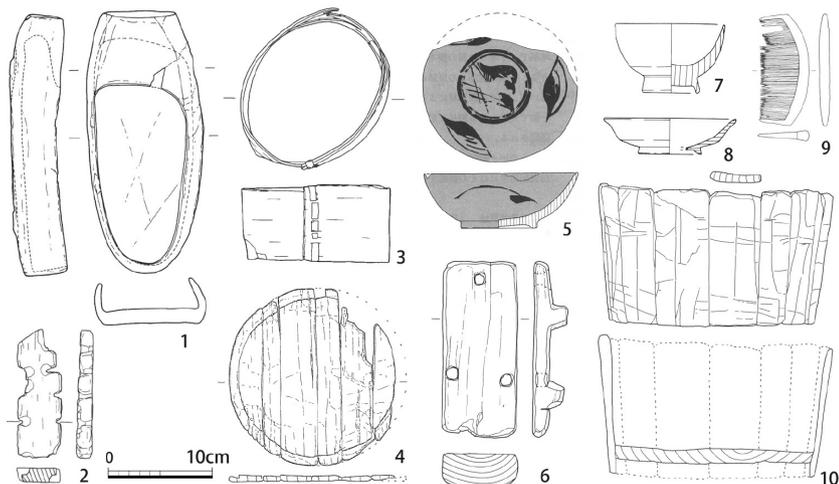


図3 池子遺跡群の木製品（古代〜近世）

《1〜4: 古代、5: 中世、6〜10: 近世》

1. 沓 2. 発火具 3. 曲物側板 4. 曲物底板 5〜7. 挽物 8. 横櫛 9. 下駄 10. 結物桶
 (1. クスノキ 2,4. スギ 3. ヒノキ 5,9. クリ 6,7. ブナ属 8. イスノキ 10. 側板: モミ属, 底板: ツガ属)

中10点がアカガシ亜属を用いて作られている。堅くて重い材質は鍬や鋤、斧柄といった農具にも多用され、作りかけの未成品や原材が多く見つかっていることもアカガシ亜属の点数が多いことの一因である。容器類には木目のうつくしいケヤキが多く、25点中18点を占める。楕円形や方形を呈した浅い容器の槽にはケヤキのほかにクスノキが、器に脚がついた高杯にはその両者以外にイヌガヤも使われた。

組合せ式の高杯の類例を探すと、静岡県登呂遺跡の高杯（弥生時代後期）は3点の部材を組合せたもので、すべてスギを用いている。奈良県唐古遺跡の高杯（写真、弥生時代中期）は器にあたる杯部（ケヤキ）と軸部（ヒノキ）のみの残存で、脚部は残っていない。色調の異なる広葉樹と針葉樹を組合せており、曲面の多い部材にケヤキを、軸部に針葉樹を用いた点は、池子遺跡の組合せ式高杯と共通している。

古墳時代になると、用材傾向や製作技術に大きな変化が生じる。古墳時代の腰掛は刳物でなく、座板に2枚の脚を結合した指物で、いずれもスギ板を用いる。古墳時代にスギが増加する全体の傾向の一例として捉えられる。刳物容器の槽は、ケヤキ主体の弥生時代の様相から変化して、7点中スギが5点を占め、広葉樹は2点に過ぎない。また、古墳時代には容器の製作技法が多様化し、刳物以外に、針葉樹の薄板を組み合わせてつくる曲物や指物が増えてくる。組合せ式の道具の場合、一つの道具に複数の部材が使われるため、樹種同定データの点数が増えることも、針葉樹の増加に影響してくる点に注

意が必要である。

池子遺跡群の生活用具からみた 木材利用の変化（古代〜近世）

古代から近世にかけては、池子遺跡群全体の傾向としてスギが一貫して3割近くを占める。生活用具についても古代にはスギの卓越傾向がみられ、スギの割合が高い（59点中37点）。一方で、中世（34点中4点）、近世（318点中76点）には減少する。すなわち、古代には生活用具の6割以上がスギを用いて作られたのに対し、中世以降は1〜2割程度に低下していく。時代を通して近場で得られる材から、しだいに遠隔地より運んできた材へと比重を移していく傾向があり、利用樹種の変化はそのことを反映していると考えられる。

古代には発火具や下駄にスギを用いたものがあるほか、点数として最も多いのは曲物の底板や蓋板で、36点中31点をスギ材が占める。同じく容器で、古代から確認される挽物は、ケヤキが4点、イヌガヤが2点と、スギは確認されない点で曲物底板とは傾向が大きく異なる。ケヤキの挽物は中世以降にもつながる漆塗りの椀や皿で、未成品の皿には轆轤挽きの痕跡が認められる。イヌガヤの挽物（椀と高杯）にも未成品が確認されており、轆轤の鉄爪の跡が残っている。

広葉樹の利用は減少していくものの、用途を選んで継続しており、ケヤキの挽物容器のほか古代の広葉樹の生活用具としては、クスノキを用いた杓がある。中世にもケヤキの挽物椀は

継続してみられるほか、クリの椀も確認できる。そして針葉樹を用いた容器としては、中世から新たに結物の技術が導入され、桶などが作られるようになる。短冊状の側板を円筒状に並べ、タガで固定し底板を取り付けた木製品である。結物導入の背景には、新しい道具や技術がもたらされたという技術的な側面だけでなく、曲物につかうことのできる木目の通直な針葉樹材が次第に減少し、より奥地でないと得にくくなるという森林資源の状況も大きく影響したと考えられる。

近世には生活用具の点数と種類が大幅に増加する。結物桶や曲物の底板、一木の下駄などにスギが多用される傾向はつづくものの、用材の多様化が進み、ツガ属の底板の周囲に16枚の側板（うち樹種同定された1点はモミ属）を竹のタガで固定した結物桶の例が確認できる。ツガ属は池子遺跡群で樹種同定された全時代の木製品2666点のうち、わずかに7点を数えるのみで、遠隔地から搬入された可能性が高い。

そして、挽物は用材傾向が変化し、クリやケヤキが減少した代わりにトチノキとブナ属が増加する。その背景として、中世に顕著となってきた木製品の流通が、近世には体制として確立したことが想定されている（3）。下駄は35点中スギが8点と最も多い樹種ではあるが、材質と製作技法の多様化は進んでおり、クリやケヤキなどの広葉樹をあわせると18点と、ヒノキやマツ属複雑管束亜属、イチヨウも含めた針葉樹計17点をやや上回る。広葉樹はほかにもイスノキの横櫓やハンノキ属の杓子などにも使われて

いる。下駄や横櫛には遠隔地からの流通品もあるとみてよいだろう。

全国的な用材傾向との比較

(杓子・腰掛・下駄)

さいごに用材データベース(1)を参照して全国的な傾向との比較を行う。杓子にケヤキを用いる例は、縄文・弥生時代と中世・近世には地域を選ばずみられるが、古墳時代から古代の例は確認できない。杓子や対応する器の形状も



奈良県唐古遺跡出土高杯(弥生時代中期) 京都大学総合博物館所蔵

全く異なることから、いちど系譜が途絶えたものが中世に別物として再開したものと位置づけられる。

腰掛は、刳物と指物の双方が弥生時代から中世にかけて存続するなかで、時期が下るほど数が減少し、指物の割合が増加していく傾向にある。一木を彫り込んでつくる刳物から、複数の板材を結合させる指物への変化は、腰掛や容器、下駄以外に木棺^{もっかん}などにも認められ、器種を超えて確認できる。これは資源利用の観点からすると、結合技術の精緻化によって、ひとつの道具の製作に要する材積を減らしたものと評価でき、省材化とともに、素材を遠隔地から規格材の形で運んでくる動向ともつながっている。

下駄は全国的には古墳時代中期以降の事例が確認でき、池子遺跡群では古代(3点)と近世(34点)の事例が出土している。近世に点数が増えるのは、やはり、台と2枚の歯を組合せた差歯^{さしは}下駄の割合が増えたことも影響している。材をしつかりと組むためには、精緻なほぞとほぞ穴を作り出す必要がある、より専門的な製作者が関わったものと考えられる。

以上、用材変化の背景には道具の製作技術や周辺の森林資源の状況、材・製品の流通体制などが大きく影響し、そうした変化が複合的に個々

の木製品に表れてくることを素描した。時代の経過とともに近くの森林資源がしだいに枯渇に向かうなか、人々が重ねた工夫のあと加工技術と運材技術の発達、使用樹種や材の入手法の変化¹を読み解くことは、いまの資源利用のあり方を見直すことにもつながってくる。流通体制の整備により遠隔地から材木や木製品を運んでくるのが通有のこととなり、その「遠隔地」が近代以降は海を越えたさらなる遠くの森へと拡大していった先に、外国産の木材を多く用いる現在の私たちの生活がある。

数十年前に植林されたスギやヒノキ、身近な里山に生育する広葉樹の木々など、これからは近くの森林資源の価値を見直し、多面的に活用していく方策が求められている。縄文時代からの数千年におよぶ木材利用の歴史を見渡すことで、今後の森との付き合い方を考えるヒントが見つかるのではないか。そんな期待も込めながら、木の考古学の研究を続けている。

引用文献

- (1) 伊東隆夫・山田昌久(編)、木の考古学 出土木製品用材データベース、海青社、449p(2012)。
- (2) 村上由美子、遺跡出土木製品からみた資源利用の歴史、湯本貴和(編)、高原光・村上哲明(責任編集)、シリーズ 日本列島の三万五千年―人と自然の環境史 第6巻 環境史をとらえる技法、文二総合出版、pp125-141(2011)。
- (3) 鈴木三男・能城修一、池子遺跡群出土の木製品および自然木の樹種、池子遺跡群X No.1-A地点 第4分冊、(財)かながわ考古学財団、pp219-280(1999)。
- (4) 山本暉久(編)、池子遺跡群 総集編 池子米軍家族住宅建設にともなう発掘調査記録、(財)かながわ考古学財団、369p(1999)をはじめとした池子遺跡群の発掘調査報告書。
- (5) 村上由美子、生活用具 宇野隆夫(編)、モノと技術の古代史 木器編、吉川弘文館、pp 125-162(2018)。
- (6) 村上由美子、木の考古学で読み解く里山の利用、野生復帰、Vol.67-11(2018)。